

会 誌

第四十九号

平成 29 年 12 月

大阪市立大学大学院医学研究科
分子病態薬理学教室 同窓会

近況の報告

山本 研二郎

1927年生まれですので、最近物忘れがひどいです。なかには、都合のよい物忘れも入っているようです。この原稿も教室の藤田さん（旧姓 中尾さん）から3回ほど「覚えておられますか」とやんわり請求されて、あわてて書いている次第です。

3月から、羽衣の実家の近くに新設された「なごみの家」という老健ホームに入っております。家内が家事をするのが、手元が頼りないといって息子が購入してくれました。3階建ての3階、隣り合わせの部屋で、室内にはベッド、机、テレビ、冷蔵庫、洗面台、トイレ（車椅子対応のせいか広い）、流し等々。食事は食堂で摂ることになっているが、同じようなものばかりで、いささかあいてくる。もちろん外食は自由だし、部屋で出前のものを食べるのも自由。

火曜日はロータリークラブがあるので、天王寺の都ホテルに行く。昼食が楽しみ。金曜日は、肥後橋の朝日会館へ催し物に参加、帰りに難波で食事するのが楽しみ。

最近読んだ本は、北斎、テーマで見る世界の名画（ヴィーナス、肖像画、宗教画、風景画）、新聞はひまつぶしに隅から隅まで読むが、記憶には残らない。

今日はこれから朝日会館へ“カイロネイアの戦い”を聞きに行き、ついでに行きつけの歯科医院へ、帰りに高島屋で食事をする予定。

以上、近況報告まで。皆様、よいお年をお迎え下さい。

「インフルエンザ」

3月末にA型インフルエンザに罹り約1週間自宅の1室に籠りました。約25年ぶりのインフルエンザです。もっとも25年前がインフルエンザであったかどうかは簡便な検査がありませんでしたので定かではありませんが、症状から診てインフルエンザと本人は思っております。11月に予防接種を受けましたが防ぎきれませんでした。全身倦怠感と38度以上の発熱で近医に出かけインフルエンザの検査を受け、タミフルを処方されました。驚いたことにタミフルを服用した翌日朝には平熱に戻り体も大層楽になりましたが、大学の仕事は全てキャンセルして5日間じっと部屋に籠っておりました。熱もないのに何もできずに部屋に籠っているのは時間を持て余し、だからと言って集中して何かできる状態でもない中途半端な時間を過ごしました。外出の許可が出た日の午前と午後の2回に分けた入学式にはなんとか間に合い、大学の皆様にご迷惑をかけることなく無事に務めを果たすことができ胸をなでおろしました。この冬は手洗いと嗽をし、予防接種も受けて用心したいと思うのですが、自分の老化を加味しても効果が得られると信じたいものです。

「ゴルフ」

最近25年ほどゴルフは練習場にも行かず、年に2回ほどコースを回るだけでした。腰痛や、いわゆる50肩で数年間悩まされてゴルフから遠ざかっていました。さらにボールの行方が見えなくなり、自打球の行方を一緒に回っているメンバーに見て頂いておりました。ナイスショットであれ、シャンクであれ、打ったボールが見えないのは興味が半減し面白くないものです。昨年の会誌に、白内障の手術後にとってもよく見えるようになった話を書きましたが、ゴルフボールの行方も良く見えるようになり下手さ加減を再確認しました。でも、ゴルフの楽しさが呼び戻され、練習を少し再開しましたが、飛距離の落ちはもちろんですが打球の行方は定まらず広角打法です。残念ながらスコアは3桁ですので、早く2桁にしなくてはと考えて、コースに出る前に練習しておかねばと時々近所の打ちっぱなしに行きます。平日に行くことが多いのですが、朝の8時から開いています。早朝の8時台に集まるのは30名ほどの男性高齢者が中心で、

打球の勢いも私とよく似た程度で、そこそこです。9時台になると若い男性がちらほらと混じり、打球の勢いは比べものにならないほどの速さで飛んで行きます。10時前から中年女性群が大勢詰めかけて来て1, 2階は満席となり3階の打席に空きがある程度になります。ゴルフ人口は減っていると思いますが、まだまだ結構な人数の人が楽しんでいるようです。

「夏休み」

今年は幸いにも入院するような病気もなく夏休みをとることができました。8月初めにインスブルック（オーストリア）に行ってきました。英語がよく通じるドイツ語圏であることを知りました。ルフトハンザ航空で関西空港からフランクフルトに飛び、プロペラ機に乗り継ぎ、氷河でできた巨大なU字溪谷を伝いながら谷底に降下してインスブルックの町に着きます。小さな空港で、飛行機から降りてのんびりと歩いて空港ビルに移動します。天気が悪く生暖かい気温で、周りに美しい山々が見えるはずですが厚い雲に覆われています。

インスブルック街の北にはノルケッテ Nordkette 連峰があり、南にはパッチャーコーフェル Patsherkofelbahn 山があり、手頃なハイキングコースが整備されています。まずは町の北にあるノルケッテ連峰の登ることにしました。インスブルックの標高は500m程で、街中のコングレスハウス Kongreehaus 近くのケーブルカー駅 Hungerdurgbahn から乗り Statin Hungerburg 駅でロープウェイに乗り換え、Nordkette 連峰の標高2334mのHafelekar 展望台へ2区間乗り継いで急勾配を一気に登ります。この日は気温が高く山頂駅でも暑く30度ほどの暑さです。マウンテンバイクで登る道が整備されており多くのハイカーやライダーが喘ぎながら登ってくる様子を見降ろしながら周りの景色を楽しみます。ロープウェイ駅から少し登り十字架のあるピークに登ると、周囲には小さな高山植物が多く咲いており気持ちがよいです。頂上付近で2時間ほど過ごしましたが、あまりの暑さで岩陰に隠れて着ているものを数枚脱ぎました。急勾配を徒歩で下るのは怖いのでロープウェイでHafelekar 駅2256mからSeegrube 駅1955mまで1駅乗って降り、Seegrube 駅からは歩いてバイクの道を下ることにしました。途中で気持ち良く下っていく何台ものマウンテンバイクに追い越されます。でも、この長い急なのぼりを根気よく、ひたすらペダルをこいで登ったライダーには敬服いたします。暑くて長い下りがずっと続き約3時間かかり下り

ましたが、途中が通行止めで地図と異なる回り道を歩きとても疲れましたので Arzler Am のレストランで大きなアイスクリームを食べて休憩して一息入れました。本当は皆が飲んでいるビールをと思ったのですが、まだどのくらい下り道を歩くのか見当がつかずに諦めました。登山道をさらに下りケーブルカーの Statin Hungerburg 駅にようやく着くことが出来ました。U 字谷の急斜面をテクテクと延々と下るのは想像以上に疲れるものでした。

次はインスブルックの街の南にあるツィルベンヴェーク Zirbenweg (霜降り松の道) を歩くインスブルック山岳ガイド協会主催の無料のツアーで参加しました。集合場所には女性ガイドが来て、まず足元のチェックを行い無料登山靴の貸し出しを行います。その後、迎えのバスに乗り Igls へ向かいますが、通常の道が工事中でう回路を利用しましたが混雑が激しく時間をロスしたので、登山ルートが変更され霜降り松の道は中止となりました。その代りロープウェイ Patsherkofelbahn に乗りパッチャーコーフェルに向かいました。参加者は 20 名ほどですが、それぞれの経験を聞き少し健脚向きのコースと初心者向きのコースの 2 組に分けます。我々は初心者組にしたところ 2 名のみで、残りのすべての参加者は健脚組となり、我々には専用の女性ガイドが付きマウンテンバイクの道をマイペースでゆっくと登りパッチャーコーフェル 2247m に上りました。途中で西のスイス側の氷河を眺め、北に一昨日登った Nordkette 連峰がインスブルックの町の上の雲海越しに見え、その奥にドイツ最高峰のツインピークが見え、南にイタリアとの境の山が見える中を放牧された牛があちらこちらで草を食べています。南のイタリア側から強い風 19m/h が吹きチロル盆地はフェーン現象で気温が上がり暑いのです。ゆっくり山頂に登り素晴らしいアルプスの景色を堪能し、強風のためフード付きの上着を着て、下着にパッチを履き寒さをしのいで丁度良い服装になります。山頂のレストランでカフェオレを飲み持参のサンドイッチで昼食を摂った後、別れた健脚組と合流するため反対側を下山し、峠越しのレストラン Boscheben で休憩後にツィルベンヴェークの一部を通りインスブルック近郊の町を眼下に見ながらロープウェイの駅に引き返しました。Igls のロープウェイ駅にバスが待機しており、インスブルックの街に連れて帰ってくれました。宿泊した宿の 1 階がカフェ・ビールの店なので、生ビールを買って部屋に持ち込み、一杯飲みながら今日一日を振り返り、きっと日本にもこんな所はあるのだろうと考えながら極上の一時を過ごすことが出来ました。

9月20日発行の大阪市立大学医学部同窓会報に三浦先生がご寄稿されました。転載させていただきます。

大阪市大医学部72年と附属病院91年の歴史－XIX

44年卒 田中祐尾 / 54年卒 三浦克之

本校薬理学教室の初代は上田重郎教授(昭和24年)、二代の山本研二郎教授(昭和48年)は平成4年退任と同時に医学部からは細谷雄二(昭和32年、生理学)、木村英一(昭和55年、生理学)に次ぐ3人目の大阪市大大学の学長に着任、また西澤良記(前)、荒川哲男(現)という本学医学部出身者としての独特な力量を発揮する三学長の先駆けとなる。多くの人材を生んだ教室は昨平成28年富田修平教授が四代に着任する。今回平成13年に開設された薬効安全性学の三浦克之教授に、この薬理学教室の創世記からの歴史に焦点を当て執筆を願った。(田中祐尾 記)

《薬理学教室の歴史》

大阪市立医科大学薬理学教室が創設されたのは昭和24年6月です。京城帝国大学時代に薬理学講座助教授であった上田重郎先生が教授として着任しますが、ご本人曰く、これは同じく京城帝大にいた本学解剖学の鈴木清教授の薦めによるものでした。

教室は戦災を免れた旧扇町商業学校の二教室で旧式化学天秤、不規則な回転をするキモグラフ数台、動

物固定器等があるだけで、凡そ医科系大学の研究室にはほど遠いものであったそうです。幸い京城帝大出身で同門の村野匡先生をはじめ吉川正治先生が教室スタッフに加わり、また澤田外科の手島皓一先生や化学研究室の佐々木大象先生の協力も得られるようになり研究の体制が整ってきました。

昭和28年には阿倍野学舎北館が完成し、その2階に化学研究室とともに移りました。この頃には本学出身の若手や京城出身の先生も加わり薬理学的研究に生化学的手法の導入も可能となってきました。

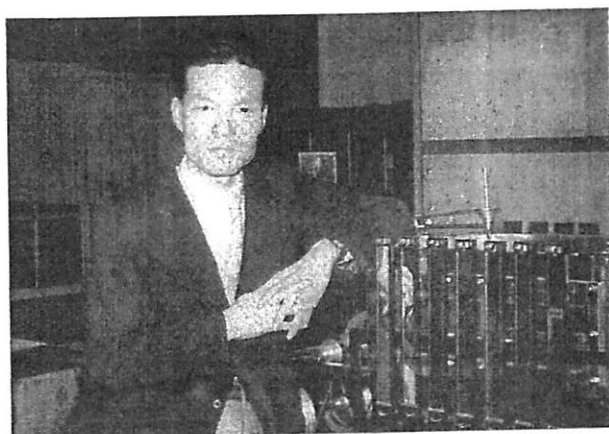
当時は抗ヒスタミン剤の薬理、ヒスタミンの病態生理、また薬物作用とその薬物の代謝についての研究が中心でありました。船江良彦先生が化学研究室に赴任した時(昭和47年)に隣室で見た古めかしいバックマンの分光光度計は、日本に入ってきた1号機か2号機と言った大変由緒のあるもので、機器が入ってきた当時は薬理学教室の先生方がヒスタミンなどの比色定量に使用され、大いに活躍したことを佐々木教授から聞かされたそうです。

昭和34年、村野先生が和歌山県立医大教授に転出(後に和歌山県立

医大学長)、昭和36年には塩野義製薬に籍を移していた山本研二郎先生が助教授として教室に復帰しました。腎臓に関する研究はこの時期から始まり、腎循環にも手をつけ、山本先生たちはレニン分泌機構に関する研究に取り組み始めることとなりました。

その後、教室に加わった岸本武利先生(のちの本学泌尿器科教授)、安部陽一先生(のちの香川医大教授)、宮崎瑞夫先生(のちの大阪医大教授)は昭和42年から順に海外留学を経てレニン・アンジオテンシン系、腎循環に関する研究がさらに発展していくこととなります。その間、昭和44年には第43回日本薬理学会総会を上田先生が主催しました。昭和48年には山本先生が本学薬理学教室の第2代教授に就任します。大学院2年生の岡原猛先生の後に本学出身の院生が毎年のように加わり最初の6年間の8名は卒後直ちに薬理学教室の大学院生となったのでした。その最初の大学院生が岩尾洋先生です。おそらく他の基礎医学の教室よりは多くのMDの院生がいたのではないかと考えています。スタッフには安部先生、宮崎先生、のちに池本文彦先生(のちに万有製薬研究所長)が加わり院生たちが指導を受けました。この頃には市大と言えば腎臓、レニンと言われるようになっていたと思います。

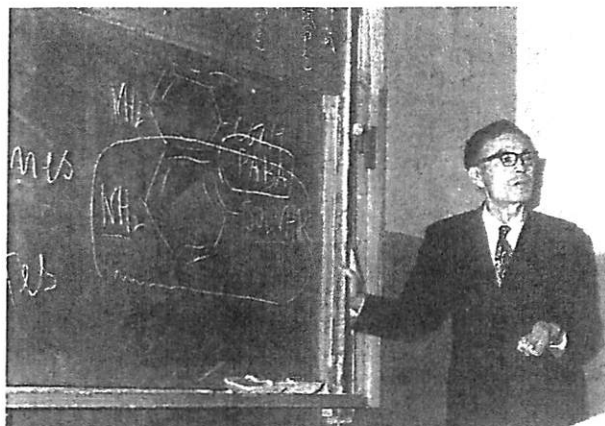
昭和51年には宮崎先生が滋賀医大へ、昭和56年には安部先生が香川医科大学教授、岡原先生が同大学助



写真① 扇町学舎時代の上田重郎先生。
ワールブルグ検圧計と共に。



写真② 昭和44年に第43回日本薬理学会主催。
左:上田教授 右:山本助教授



写真③ 上田教授最終講義(昭和48年2月19日)。



写真④ 平成10年 基礎学会にて。
左から 船江良彦先生、山中伸弥先生、岩尾 洋先生



写真⑤ 山本研二郎教授退職記念講演

教授、今西先生が助手で転出、山本先生の下で大学院を修了した岩尾洋先生、雪村時人先生がスタッフとして加わります。また岡村富夫先生は滋賀医大のスタッフとして赴任(のちの滋賀医大教授)、三浦、金勝慶先生も順次、市大薬理のスタッフとなっていきます。雪村先生、三浦は心房性利尿ペプチドやエンドセリンなどの体液性因子の研究、金先生はレニンの代謝に関する研究も推し進めました。昭和60年には第8回日本高血圧学会を山本先生が主催されました。

また、山本先生は昭和63年からは医学部長、平成4年には大阪市立大学第8代学長に就任します。山本先生は海外にも多くの親交を深めた研究仲間がおり、山本教授退職記念講演会に駆けつけて頂いたDr.Detlev Ganten (MaxDelbrueck Center for Molecular Medicine) は雪村先生の留学先でしたし、Dr.Joel Menard (INSERM U36) には宮崎先生、岩尾先生が、稲上正教



写真⑥ 岩尾 洋教授
第83回日本薬理学会主催(平成22年)

授(Vanderbilt大学)へは岡村先生、川村実先生、Dr.F.A.O.Mendelsohn (Melbourne大学)へは山田浩先生、宋景富先生、相馬俊子先生が留学、Dr.Victor J Dzau (Stanford大学、現President of United State National Academy of Medicine, Duke 大学)は中村憲史先生、池本先生が研究を共にしていた先生と言う具合で山本先生には繋ぎの深い先生ばかりです。

また昭和60年にはDr.Dzau(当時Harvard大学)、昭和61年にはDr.Ian A Reid (UCSF)、昭和62年にはDr.DeYong (Utrecht大学)、平成2年にはDr.Colin Johnston (Melbourne大学)が客員教授として薬理学教室に加わって頂きました。平成4年には、香川医大の安部教授の下で助教授となっていた岩尾洋先生が第3代教授に就任しました。山中伸弥先生は山本先生の最後の院生であると同時に岩尾先生のもとでの学位第一号となります。岩尾教授の下で金勝慶先

生は新たな研究分野としてレニン・アンジオテンシン系と臓器障害についての研究を推し進め臨床から来た多くの院生を指導しました。山中先生は大学院修了後、米国留学を経て平成8年に市大薬理助手、平成11年には奈良先端科学技術大学院大学助教授として転出、その後、同教授を経て京都大学教授となっています。

平成12年、大学院医学研究科再編に伴い薬理学講座は分子病態薬理学に、船江教授の化学研究室は生体化学教室となります。船江先生は薬物代謝酵素P450の分子種の精製では草分け的存在で国際的評価も高く、平成17年定年とともに教室を閉じられましたが、スタッフであった今岡進先生(関西学院大学教授)、廣井豊子先生(帯広畜産大准教授)、岡真優子先生(京都府立大学准教授)は現在も活躍しています。平成13年には修士課程設置に伴い三浦は薬効安全性学教室の教授に着任、平成16年には光山(金)勝慶先生は熊本大学医学部教授として転出します。

岩尾教授が平成22年に第83回日本薬理学会年会を主催したのは上田先生が開催されてからちょうど40年目のことでした。岩尾洋先生はその後、社団法人日本薬理学会理事長としても活躍し平成26年定年退職されました(現在は四天王寺大学学長)。薬理学講座は平成28年富田修平先生が第4代教授に着任しています。(三浦克之 記)

「治楽会」のことと、教室人事のこと

富 田 修 平

大阪に赴任して 2 年目の冬がやってきました。治楽会会誌には、教室に関連する今年度の研究活動、人事や出来事などを中心に思うところを含め述べていきたいと思います。今回は、治楽会に関することと教室人事について述べたいと思います。

「治楽会」について

先日、山本研二郎先生が大学病院受診の帰りに薬理学教室にお立寄りになりました。前もって秘書の藤田明子さんには「お腹が調子悪いから今から大学病院を受診するのでついでに寄る」とご連絡くださっていたのですが、山本先生は受診後にサンドイッチを買って薬理学教室にやってこられました。そして「これ、美味しいな」と召し上がりながら、三浦克之先生や私とお話されました。今日は天候もよく、余程お暇で外出されたかっただけなのではないかと三浦先生と勝手に推察しながら山本先生とお話しさせて頂きました。

その時に「治楽会」の命名由縁について伺いました。もともと上田重郎先生が命名されたそうですが、上田先生をご指導なさった大沢勝先生と寺坂源雄先生の主宰する教室の同門会名のそれぞれ一字を合わせて「治楽」となったようです。「治」はうるおいを持たせて調和する、心や関係がうちとけあって一つになる、といった意味で「コウ」と読むようです。和気あいあいとした教室作りを願って命名されたことと思います。それに関連してもう一つ伺ったことは、治楽会には会則が設けられていない理由についてです。会則がないので、役員の設置も総会で会計・監査に関する報告、もちろん会費納入もないわけですが、なぜそのようなシステムになったのか伺ったところ、特に明確なお答えはいただけませんでした。実は、以前岩尾洋先生にも同じ質問をしたことがありましたが、やはり「治楽会はあれでええんや。まあ、好きな様にしたらええ。」の一言でした。和気あいあいと集う治楽会に余計なものは必要ないといったところでしょうか。治楽会の名前の由来と現在の同門会スタイルは大阪市立大学医学部薬理学教室の伝統ということで拝受いたします。

また、会員皆様の会誌ですので、今年から治楽会会員の皆様に近況報告をお

願いたいと思います。こちらから指名させていただきますが、ご寄稿されたい会員の方はどうぞご連絡くださるとありがたく存じます。会誌の充実を図っております、ご協力よろしくお願い申し上げます。

教室人事について

今年3月に、これまで講師として教室を支えていただいた塩田正之先生が、本学医学研究科の研究支援プラットフォーム共同実験機器施設に転出されました。塩田先生は、岩尾洋先生のもとで助手時代から研鑽を積まれた、生化学をベースとした薬理学者です。研究分野は、循環薬理に関する病態の分子機序の解明や癌に関する耐性機序の解明からバイオマーカーの創出までと、多岐にわたっています。昨年度は塩田先生から教室及び大学内の様々なことを教わりました。事務的な業務からはじまって、学部学生教育に関するスキル、大学院生の研究指導、教室運営のサポート、どれをとっても内容に抜かりがなく、オーガナイザーとして十二分に活躍して頂きました。もちろん所属は変わりますが、薬理学教育および研究面では引き続きお世話になっています。責任感も強く大変心強い仲間です。

また同じく、田中昌子先生が、早稲田大学理工学術院先進理工学部生命医科学科に助教として異動されました。田中先生は、塩田先生と一緒に癌耐性の分子機序の解明について研究を進めてきました。もともと塩田先生に研究の指導を受けたと聞いていますが、この1年間研究活動をご一緒しましたが、研究を進める上での論理性は明確で、将来が楽しい研究者だと思います。田中先生には、研究環境の整備について塩田先生と一緒にこなして頂き大変お世話になりました。また、医学部生や大学院生の教育および研究の指導にしても明確で分かりやすい良い教育者です。加えて田中先生の歯に衣着せぬ物言いは教室全体に良い緊張感を持たせてくれました。これらのことはもちろん塩田先生の良いご指導の結果とも思います。

塩田先生と田中先生は、岩尾先生と三浦先生のもとで育った教育研究者ですが、後任の私にとっても教室の宝です。これからのお二人の益々のご活躍を祈念しています。一方、今年度より山口雄大助教と北島正二朗特任講師が着任され教室員が増えました。これからの薬理学教室を担う若手の活躍に期待しています。

着任ご挨拶

山口 雄大

本年10月より分子病態薬理学に助教として着任致しました、山口雄大と申します。私は大阪府豊中市の生まれの大阪育ちで、平成12年に大阪市立大学医学部に入学、勉強が好きだったので人より1年多く勉強して、平成19年に大阪市立大学医学部を卒業致しました。学部学生（2回目の2年生）時代にRI実験施設の木村政継先生（当時は生物物理学講座であったと思います）と井上晃先生（当時は第一生化学准教授）に拾われて、研究の指導を受け実験のお手伝いをしたのが、基礎研究の世界の入り口でした。

「臨床は研修の2年でやめて基礎に行こう」と考えるようになり、「折角なら、2年間しっかりやれるところで」と大学卒業後は島根県松江市の病院に勤務することにしました。臨床医としての仕事は思っていた以上に楽しくまた、松江の風情が私の性情に合っていたために、研修終了後も循環器内科医として3年間勤務しておりました。そのまま、松江に根付こうと思っていた矢先に、市大循環器内科から大学院への進学を勧められ、平成23年に本学医学部循環器内科の博士課程大学院生となり、平成24年に大阪に戻って参りました。

当初、心音の研究であったはずの研究テーマは、医局の事情と私の強い希望とで、基礎研究へと方向転換することに。そこで、泉康雄先生、三浦克之先生そして岩尾洋先生のご指導の下、薬理学教室で循環器領域の基礎研究をさせて頂いておりました。薬理学教室で実験したのは実質3年くらいですが、in vivo から in vitro まで、色々な実験を教えて頂きました。

平成27年には学位を取得し、循環器内科医局には申し訳なかったのですが、同年10月からは新潟大学医学部細菌学教室（松本壮吉教授）へ赴任することになりました。新潟では当然、循環器ではなく結核菌やその近縁の抗酸菌の研究をしておりました。Bacteriologyの世界はこれまでの研究とは全く考え方や感覚が違うところもあり、非常に良い刺激を受けました。また、結核菌の生活史の特異さに魅かれ、研究に没頭しました。

この度、2年間の新潟大学での勤務を経て、巡り巡って再度、大阪に帰ってきました。富田修平教授の下、新たなスタートを切ったところです。新潟での2年間ですっかり結核菌の虜となっていましたので、今後は結核研究と循環器研究の二本立てという異色の組み合わせで、益々研究に励みたいと思って

おります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

『多様と寛容の社会へ』

北島 正二郎

2017年4月より分子病態薬理学にて特任講師を務めております、北島正二郎と申します。多彩・多様な人材の集まる薬理学ですが、私は2003年に広島大学歯学部を卒業した歯科医師です。卒後は広島大学口腔病理学教室において博士課程の研究および、大学病院の検体の病理診断に携わってきました。さらに博士（歯学）取得後3年間、助教として同病理学教室にいましたが、2010年に一念発起しシンガポールに渡り、Cancer Science Institute of Singaporeにてポスドクとしてのトレーニングを積んで参りました。16年に帰国し、縁あって今春に大阪市立大学に赴任した次第です。

研究においては、一貫して癌研究に携わってきましたが、切り口はその時々で様変わりしてきました。広島大学では学部生の頃から、細胞周期制御におけるユビキチン化とその異常を研究しておりました。シンガポールでもユビキチン研究をするつもりで渡星したものの、癌幹細胞研究をやってみないかと言われる、培養系でのモデル作りなどをしてきたのですが、そこから癌幹細胞の微小環境の中での動態を理解すべく、低酸素および細胞代謝の勉強を始めました。これが大変面白く、現在に至るまで続いております。こうした経緯から、現在一言で研究内容を説明する時は、「癌幹細胞における低酸素環境下でのエネルギー代謝制御」、と答えています。元々変わり者なのか（医歯薬系で基礎研究をする人は大抵どこか変わっていると思いますが）、代謝研究の中でも特に、老廃物による代謝ストレス応答に興味をひかれております。マイナーなテーマとはいえ、最近アカデミアでも社会的にも注目の高い腸内細菌叢（フローラ）にしても、個体としての“老廃物”の研究とも言えますし、仮にトイレの無い生活環境を想像して頂ければお分かりと思いますがそれは決して無視のできないことです。と申しますのは幾分苦し紛れではありますが、それでも老廃物を科学することは、大変重要なことであると信じております。

シンガポールでの6年半は、研究や英語のトレーニングというだけではなく、異文化と触れ合い、その中で共に研鑽する仲間を得るという貴重な経験を積む

ことができました。今ではシンガポールをはじめアメリカ、中国、日本などに分散していますが、事あるごとに相談したり議論できるかけがえのない人間関係を構築できました。また妻と二人で赴いた当地で家族が四人に増え、忘れたい地となりました（なお帰国後にもう一人増えました）。シンガポールはアメリカとはまた違った「異文化のるつぼ」であり、人々の活気や寛容さ、働き方、生き方は大変参考になりました。そこには、アカデミアを含むこれからの日本の社会にとっても重要な示唆があると考えております。私個人の力はとても小さいものですが、公私のそれぞれにおいて私なりのコミュニティを形成し、その共同体の中で次世代に残せるものを築いていきたいと考えております。今後ともどうぞ、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ご挨拶

西田 行栄

昨年9月より研究補佐をしております西田行栄と申します。

私は大阪市立大学大学院理学研究科で修士を取得後、株式会社ティー・エヌ・テクノスにて7年間就業しておりました。そこでは、武田薬品工業株式会社から試験を受託し、主に薬物スクリーニングを行っておりました。会社の移転に伴い退職後、京都大学と大日本住友製薬株式会社の共同プロジェクトである、DSKプロジェクトに派遣社員として就業し、1年間、吉川清次先生の下で乳ガン研究の補佐をしておりました。出産を機に職を離れましたが、再び社会に出て働きたいとの思いが芽生え、大学の同級生である田中昌子先生に紹介していただき仕事に復帰し、現在に至ります。

採用していただきました富田修平先生と、紹介していただきました田中昌子先生に、この場を借りてお礼を申し上げます。

振り返ってみると、育児に専念していた4年間のブランクはかなり大きかったと思います。かつては何気なくやっていた実験やピペット操作に自信が持てず、プロトコールを何度も確認したり、サンプルの順番が間違わないか不安で慎重に進めたりと、実験が思うよう進みませんでした。また、実験以外にパソコン

でもブランクを感じました。Windows と Macintosh どちらもある程度使いこなせていた私ですが、4 年前とはシステム大きくが変わっており、どこで印刷できるのか、ファイルを保存できるのかわからず困りました。数式の入力や、単なるコピー&ペーストも若干変わっており、苦勞しました。

仕事を始めて 1 年経ち、再現性のある結果が得られたりすることで、自分の実験手技にも自信が出てきており、少しずつですが仕事にも慣れてきたのではないかと思います。研究補佐として先生方に満足していただけるよう、日々努力していきたいと思っています。

皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

喜寿を迎えて

安部 陽一

還暦、古希、喜寿 まだまだ続く。私もいよいよ喜寿を迎えた。嬉しいのかと問われると、返答に困る。少し衰えているが身体は人の助け無しで自由に動けるのでよしとしよう。薬理学教室の仲間、玄蕃先生、宮崎先生も喜寿を迎えている。両先生の気持ちもおききしたいと思う。宮崎先生は、誕生日が 2 月 29 日であるので、まだ未成年とおっしゃるかもしれませんが。

当方の年齢になると、明日のことは若い人に任せ、自分自身の過去を振り返り歩んだ道を再検証するのが一般人の行いと思われます。当方も同じであります。しかし、人間とはよくしたもので、苦しかった出来事は殆ど記憶に残らず、楽しかったこと、嬉しかったことが記憶の大部分を占めている。これは楽天的な私に限ったことではなく、昔からの友も同じように思っているようです。この稿では、主に香川大学医学部退職後の 11 年間を振り返り、その時々を感じたこと、現役の時にこれをしておけば良かったと思ったことを綴りたいと思う。この考えに至ったのは、大阪市立大学医学部同窓会誌に三浦先生が薬理学教室の歩みを紹介していただき、それを楽しく読ませていただいたことを思い出したことです。特に、同門の山中先生がノーベル賞を受賞したことを紹介している箇所を何度も、嬉しく、誇りに思いながら読み返しました。

私は、昭和 41 年に大学院生として薬理学教室に入局しました。上田先生、山

本先生のご指導を受け、昭和 56 年（1981 年）に永くお世話になった山本研究室から新設なった香川医科大学薬理学教室に同門の岡原猛先生と赴任しました。その後、岩尾先生、今西先生等と共に研究室の整備、研究体制を整え何とか新設のハンデイーを乗り越えることができました。有難いことに、岡原、岩尾、今西先生のお力により、多くの有能な仲間が研究室に集まってくれました。そして成長し、各々は大学、研究機関に乞われ転出していきました。岡原先生は堺市医師会長、岩尾先生は我が大阪市立大学医学部薬理学教授に、玉置先生は徳島大学医学部薬理学教授に、安岐先生（大学院 2 期生）は香川大学医学部寄付講座教授に、清元先生（大学院 3 期生）は東北大学メガバンク機構教授に、西山先生（大学院 7 期生）は香川大学医学部薬理学教授にそれぞれ就任されご活躍されています。その他出身者（留学生を含め）も医療機関、製薬企業の中核として頑張っているようです。特筆すべきことは、香川医科大学生化学出身の富田先生は、前出の徳島大学医学部薬理学の玉置先生のもとで研鑽を積み鳥取大学医学部教授を経て我が大阪市立大学医学部薬理学教授に就任されました。香川大学出身の富田先生が私の母校の教授に就任されたことは、格別の思い、嬉しさがあります。

当方はのんびり屋で大学退職後の生活を全く考えていませんでした。岩尾先生はじめ周りの人が心配して、岸本先生の紹介で看護学校の職を得ることが出来ました。週の前半の勤務です。週の後半は高松市にある NTT 西日本高松診療所・健康管理センター（旧逋信病院、現オリーブ高松メディカルクリニック）で治験の仕事をするようになりました。福井先生（大阪市大出身、香川大学薬理学助手から転職）がボスです。大阪、高松の 2 重生活の始まりです。

看護学校での生活：学校運営には余り関与せず、主たる仕事は授業です。准看護師の資格をもった学生が対象です。担当科目は、医療論、薬理学、病態生理学の 3 科目で年間授業時間は 40 コマ程度です。学生の受講態度は医学部学生に比べ非常に熱心で、当方も真剣にならざるを得ません。しかし、病態生理学の全般を授業するためには、幅広く勉強しなければ成りません。医学部での授業に比べ、準備に費やす時間が大幅に増えたことは間違いありません。その結果、今まで如何に当方の知識が貧弱であったかに驚きを感じるに至りました。勿論、これは当方に限ったことですが。準備の過程で得た新たな（？）知識を現役時代の研究に応用できれば、一歩進んだ研究成果が得られたのではないかとしばしば考えました。皆様に思い当たるところがあれば、自分の研究分野以

外の知識、情報を極力得るようにして如何でしょうか。現役時代の一例を紹介します。山本先生は、ある雑誌社から「カリクレインーキニン系と腎（記憶が不確か）」の総説執筆を引き受けていたそうです。ある日、雑誌社から出稿の督促電話がありましたが、あいにく山本先生は海外出張中で帰国まで原稿を待てないとのことでした。困りましたが、三浦先生の協力を得て、4-5日で原稿を作成した記憶が残っています。この過程で得た知識を早速生かして、アンジオテンシン変換酵素阻害薬の腎作用にカリクレインーキニン系がどの程度関与するかの実験計画を立て実施しました。カリクレイン阻害薬の *in vivo* での効力判定に時間を費やしましたが、納得のいく結果が得られ *J. Pharmacol. Ext. Ther.* に投稿しました。驚くことに改訂なしに即受理されました。当方にとって初めての経験で感動したことを思い出します。この論文は非常に評判が良く多く引用され、また日本腎臓学会総会の招待講演者が本論文の Fig. の1枚を提示し講演していただいたことにも喜びを覚えたことを思い出します。私も ACE 阻害薬の作用にカリクレインーキニン系が関与することは知っていましたが、この総説執筆の過程で得た知識、情報がなければ前に進めなかったと思います。少し幅を広げ情報の取得をすることが非常に大切と灌得ます。

治験に携わって：福井先生が所長を務める NTT 西日本高松診療所では、主に生活習慣病治療薬の治験（高血圧、糖尿病、脂質異常症など、Phase 2, 3 が中心）を年間5-6件実施しています。やせ薬の治験の2、3を紹介します。その1つは、カンナビノール（マリファナ）受容体 (CB2) 遮断薬です。以前から、この薬物はヨーロッパでやせ薬として市販されていたようですが、医薬品としての認可を受けるため治験が世界中で開始されました。本院は Phase2 の担当です。12例（半数はプラシーボ投与）でスタートしました。投与開始2ヶ月後には明らかな体重減少例が5-6例認められました。しかし、その内うつ症状を訴える参加者（2例）が現れ、1ヶ月から2ヶ月の経過観察後治験薬投与を中止しました。うつ症状の発現については、以前から報告されていましたが、肥満者は「食べたい、痩せたいの両欲の葛藤」でうつ様症状が発現するとも言われていましたので、1-2ヶ月判断を先送りしましたが明らかな症状ですので中止を決定したところです。体重低下は有意に認められましたが、うつ病発症も明らかでしたので、世界的に治験は中止となりました。第2の薬剤は、セロトニン (5-HT₇) 受容体拮抗薬で国産です。Phase2 試験を行いました。目的とする体重低下効果は明らかでなく、身体症状がでないがほぼ全例で赤血球減少 (10-15% :

肥満者の多くは赤血球数 550 万/ μ l 出 10%低下しても正常範囲) が認められ、開発中止となりました。第 3 番目の薬剤は、非常に単純で腸管からの吸収を抑制する薬剤でした。副作用は全く認められません。体重は有意に低下しましたが、その程度は軽度で数 Kg の低下にとどまりました。治験が完了し、審議会もパスしましたが、発売の許可は出ていません。このように多くの新薬が開発されていますが、治験の段階でカットされるものも多いことに驚きです。以上、退職後の仕事で感じたことを書き綴りましたが、異なる職場での生活は楽しく又他業種の知人を多く得られたことは私にとって大きな幸せであります。

Count your ages by friends not years.

皆様お幸せに

老爺のたわごと； 海外交流編

大阪医科大学名誉教授

宮崎 瑞夫

この機関誌に寄稿するのは何十年ぶりだろう。創刊のころはよく書きました。読者もすっかり様変わりだろうから何を書けばと思案の態。こんな爺さんも居たということと、こんなことも昔はあったというようなことで義務を果たすべしとは思ったが、薬理学教室とかかわって 51 年も経つと結構いろいろあって、テーマを何か一つに絞らねばと、このタイトルにした次第。

私が薬理の大学院生になったのは 1966 年です。院生 1 号は清水先生、2 号は長谷川先生。3 人目が安部先生、4 人目が私です。安部先生と私は同期ですが、先生は学生時代から薬理学を志されていました。私は、小児科の教授の命で、突然、薬理行きになったので、当然の順番です。因みにその後大学紛争などで暫く途絶えて 5 番目が岡原先生、岩尾先生と続きます。当時の教室では、山本研二郎先生が、ミシガン大学生理学 Vander 先生の下での留学から帰国されたところで、最先端の腎臓からのレニン分泌機序の研究が始まらんとしていた時でした。私はその研究グループの一員に加えて頂きました。そこでのドジ振りは、数多文章に残してあるのでここではパスします。その後、岸本先生がエモリー大学薬理へ留学されその後任として安部先生が大学院在学中に渡米され、マイ

クロスフェーザー法による腎皮質血流分布の測定法を確立されました。まさにその間、大阪市大では大学紛争の嵐が吹き荒れました。機動隊の導入で何とか大学が表向き平穏になり、闘争家たちが医学部の悪の根源であると糾弾した学位の授与再開の第一回学位審査に私は応募し、全学公開で超満員の講堂での審査を何とかパスしました。本来これで小児科へ戻るはずでしたが、私を薬理へ送り込んでくれた高井教授は退職されており、尊敬していた美濃助教授（後大阪医科大学教授）も紛争の大学に愛想を尽かして教室を去られ、家なき子状態でした。その折、山本先生が留学を勧めて下さったのです。別のところへとも言われたのですが、安倍先生の後釜を望みました。一人で初めてのところで苦労するよりも先生のあとなら楽にやれそう、という浅はかで卑劣な発想でした。思惑通り先生は一ヶ月帰国を遅らせて私と一緒に暮らして研究、生活の数多の知識を伝授してくださいました。1972年9月のことでした。アトランタでの生活を楽しめたのは全く先生のお蔭でした。5か月前に就航した日航ジャンボに羽田から搭乗。ジャンボは未だ西海岸まで飛べず、ハワイ経由でした。エモリー大学薬理はモラン教授でしたが、その中に臨床薬理学部門が置かれていてボスはゴールドバーグ教授（内科兼任）でした。我々、市大勢の直接のボスは彼の部下のマックネイ先生でした。ゴールドバーグ先生は、ドパミンの腎血管作用を発見しこの薬の臨床応用を始め、同時に臨床薬理学を初めて提唱された大先生です。あるとき二人が連れだって私のところへ来まして、日本語の文献のコピーを差し出しすぐ訳せというのです。なんとそれはわれらの森本史郎先生（大阪薬大教授）が日薬理誌に2編に分けて掲載された論文でした。ドパミンの腎作用がイヌで詳細に調べられていました。二人はだんだん青ざめていきました。そして、最後に、「英語で書かれてなかったラッキーだった。素晴らし仕事だ。Thank you Mizuo」とつぶやいて去ってゆきました。私は、誇らしくも無念で複雑な気持ちで見送りました。ゴールドバーグは、その後市大薬理をずっと尊敬してくれていました。その後シカゴに移り、舩江先生の留学先になりました。早世されたが、生きていてくださったら教室の強力な交流先になったのにと惜しまれます。

2年余の留学の後、助手の席を上田教授から頂きました（1972年10月）。ここから私の薬理歴が始まりました。秋に帰国後、ベルリンで放射物質による腎臓学という国際シンポがあるのを知り、帰国前に私が作り上げた、イヌ動脈血と腎静脈血を体外回路でWell型シンチレーションカウンターに¹²⁵Iイヌリン

誘導体を誘導し GFR を連続測定する装置を用いて、グルカゴンが濾過値を増やすという仕事を送ったら、なんと旅費講演料付きで招待してくれたのです。山本先生に相談したら行け！と。そして金が続く限り旅行をして来いと送り出してくれ、当時東大からベルリンへ留学中の遠藤仁先生（杏林大学教授）、ミュンヘン留学中の市大貝田守教授（法学）を紹介してくださいました。ゲートポイントチャーリーを超えて東ベルリン見物も十分させてもらいました。ミュンヘン大学は腎臓生理の大先生ツーロー教授を厚かましく訪ねました。遠位尿細管 Na 濃度によるレニン分泌機序の教室です。オペラも何度も観ました。ハイデルベルグのグロス大先生も訪ねました。AII アナログの AII 拮抗薬を、旧チバガイギー社を通じて世界の研究者に使わせてくれた先生です。ペプスタチンのレニン阻害作用を知ったのはここでした。因みに、この旅行で悟ったことは、突然手紙をよこし（当時メールはありません）のこのこやってきて言葉もロクに通じない日本の若造に、大先生がほんとにやさしく接して下さることでした。安い宿がいいだろう、おまえの研究の相手ならこの教室員がよかろうと。これが、私をして、データを出したらそれをもって外国へ行くと、全く次元の違う旅行ができるという不埒な人生感へと導いたのです。ミュンヘンには、メルボルンから若い研究生が来ていて話を合わせてくれました。メンデルゾーン先生です。後に ACE の局在で名をなした彼との出会いは、宋先生や山根先生の留学に繋がりました。ハイデルベルグは、山本先生が知り合いだったガンテン先生がいましたが、若いホフバウワー（後チバガイギー）やウンガー先生と知り合いました。後、雪村君がウンガー先生のところへ。ユトレヒトの de Jong 先生は、山本先生が一度米国で会ったことがあるから訪ねて来いといわれて、マグヌス研究所（マグヌス装置の開発者を讃えて薬理学教室をこう呼ぶ）へのこのこ。これは、後に私自身が再訪して、腎性高血圧ラットの作成法、血圧測定法を学び、秘伝のシルバークリップをお土産にたくさん作って持たせてもらいました。彼が、ストラスブールへ移ってから、中村敏子さんの留学に繋がりました。ご夫妻とも素敵なオランダ人で、亡くなられた後に、オランダの田舎へ弔問に伺いました。ベルリンの後、足を延ばしたのは、イタリアの Padova でした。内科の先生がレニン阻害薬の論文を出していました。イタリア美人の大学院生が一週間面倒をみてくれまして、赤いツーシーターのオープンカーであちこち案内してくれて非常にしあわせでしたが、レニン測定のインキュベーション中に突然シエスタだからと、氷に漬けて帰ってしまうのには仰天しました。ハー

ベイが学びガリレオが天文学を教えた古い大学ですが、あまり勉強にはなりませんでした。イタリアとドロミテアルプスをおそわりました。

1975 年は、フィレンツエの国際腎臓で発表。金が無いので、ソ連の飛行機でコペンハーゲンに降りて、汽車でイタリアへ。エモリー同時期に居たチャンドラマーガー先生（中国系インドネシア人）が、母校のベルギーのルーベンカソリック大学臨床薬理に戻っていたのを訪ねた後、パリへ欧州視察の山本先生に合流するため移動。オルリー空港へ向かい、前にソ連機で着いたあたりへでもと歩いていたら先生がひょっこり向こうから歩いてこられたのです。後で、パリにはシャルルドゴールという大きい新空港があることを知りましたが、その時は先生の到着日しか知らずお迎えする宿も決めてなかったし、空港は勝手にオルリーと思い込んでいましたから、会えたのが奇跡でした。先生とはその手の旅行を何度もしました。さて、パリでは、私が腎臓学会でお目にかかった留学中の慶応猿田内科の中根晴之先生（病院経営）を訪ねて、IMMSERM U-36 という研究室を訪ねたのです。そこはメナール先生とコルボール先生の研究所でした。二人とも私とは同年令なのにすでに教授でした。もしかしてお前たちは、レニン精製の最先端の論文を出したあのメナールとコルボールかと問いただしたら、そうだよとニコニコ。何たる奇遇と山本先生と大喜びした次第でした。ここへは、私のレニン阻害薬のヒトレニンに対する力価を試させてもらいに後にしばらく滞在させてもらいました。一年分の教授並みの給料の基金を用意して下さったのに三ヶ月しか出張させてもらえかったのは残念至極でした。山本先生なら 2 年は OK? なめるな！と先生に一喝されそうですが、滋賀医大が立ち上がった直後のことでした。その後、中村憲史君、岩尾先生の留学につながりました。最後に書きたい大物は曹文凱先生です。Victor DZAU といえばお判りでしょう。現 US National Academy Medicine の President です。Zau で差支えないのだが、Z では学校で名簿の最後にされてしまうからと移住した際に父上がこの表記にしたのだそうです。ハーバードは、池本先生がヘイバー大先生を訪ねたのが始まりです。ハーバードは高折先生、奥西先生（島根医大）が留学。その生きのいい若い研究者を市大に招いて来阪したのが Victor 先生でした。私にも少しは接待を手伝うようにとのことで、京都圓山公園の夜桜をみせたり、滋賀医大での講演会を用意したりしました。彼は今でも言います。あの夜桜の折に、日本人感が激変したと。日本人は静かで感情を出さないと信じていたが、踊って歌う、これまで全く知らなかった日本人の側面を見せてもらったと。私

には、お前は他の日本人の先生たちとは些か違うといひます。どこが違うのでしょうか。しかし、後で触れる森下竜一君が、「Dr. Dzau が日本人の先生方を呼ぶ時に、first name で呼ぶのは先生だけです。」とよく不思議がります。「Miyazaki」が発音しにくいから？彼はその頃、組織に RA 系の要素の遺伝子が一式そろっていることを見つけて組織の AII 産生を予見していました。しかし、仮説に過ぎないと、特に NY 学派には受け入れてもらえていませんでした。私も高血圧患者ではレニン活性はほとんどが上がり、むしろ低く、RA 系は高血圧と無関係、ACE 阻害薬の降圧は、キニン増加のせいという学会の大勢を何とかひっくり返してみたいと考えていました。キニンでなく、RA 系だ。どこかに隠れていて見つけられていないだけなんだと。しかし、攻め手が見つからず時間だけが過ぎていましたが、やっとその頃、高血圧のイヌやラットの血管 ACE 活性が上がっており、高いと ACE 阻害薬は降圧を示すが、低いと降圧作用が出ないという事実をほぼ確信できていたのです。それを彼に話したら飛び上がって喜んでくれました。組織 RA 系が存在するという証明を Mizuo がしてくれたと。私は、別に彼の仮説を証明するつもりはなく、研究の切っ掛けであった RA 系が軽んぜられるのがいやだったのです。その後には、キマーゼの AII 産生機構とその病態機序の発見もできたのは全く幸いでした。Dzau 先生の所へは薬理からは、中村憲史君が行きました。彼は今、米国で水虫の新薬の開発に成功してホノルルの超高層マンションで悠々自適とのこと。大阪医大に赴任して間もなく、Victor 先生との科研の海外共同研究費が当たったので、ボストンへはよく行かせてもらいましたが、丁度、大学院の研究で阪大四内から森下竜一先生（阪大教授、アンジェス社長）が私のところで研究していたので、彼をボストンにつれて行って Dzau 先生に引き合わせて採ってもらいました。意気投合していましたが、彼のその後の活躍はご承知のとおりです。当時、ハイデルベルグからマーチン君が来ていました。中村君の親友でしたが彼はベルリン自由大学（後フンボルト大学に併合）の医学部長になりました。これがホントのディーン マーチンだと彼の学部長室で大笑いしたことを思い出します。

この辺りでめにしますが、ヒトとの交流は人生でまことに大事なことであり、その交流は一つの切っ掛けが生み出します。私は、外へ出ることで教室の先生方に迷惑を掛けたのですが、あちこちほつつき歩いて人脈を作ってきました。薬理の後輩たちの海外留学の幾分かには貢献できたのではないかと思います。もっとも山本先生が常にフォローしてうまく繋いでくれたお蔭です。若

いみなさんには、興味ある論文を書いている人のところへ是非尋ねて行くことを進めます。本当に世間が広がり研究が一層楽しくなります。また、一方では、人が訪ねてくれる教室を作ってほしいと願います。ネットだけの交流では奥行きがないように思います。若い先生が、薬理は外国と交流して楽しい研究生活が送れるところだと思ってくれると幸いです。

二年目を迎えて

岡村 富夫

今回の寄稿にあたり、以前本誌に書いたことを全く思い出せず、ひょっとしたら初めての寄稿かもしれないと思いながら教室に尋ねたところ、平成11年に「杉本町、旭町、ナッシュビル、そして瀬田」というタイトルで滋賀医大の教授就任時に書いていることがわかりました。二度目の今回は、滋賀医大を定年退職したタイミングでの依頼だと思っています。

実際に退職したのは去年の三月だったのですが、その年は教授不在のため、滋賀医大の医学科、看護学科ならびに周辺の看護学校の教育に全て携わり、「フルタイムの非常勤講師」と称して、現役当時と何ら変りない一年を過ごしました。今年の一月に後任の方が来たので、四月からはようやく退職者としての生活が始まりました。時間の使い方として一番多いのは近隣のトレーニングジムに通い始めたことです。私自身は、ご承知の方もおられると思いますが、根っからのインドア派であり、楽器を吹いたり、室内ゲーム（チップや牌を扱うものを含む）に興じたりで、スポーツはまったくと言っていいほど縁がありませんでした。ただ誘われるまま半年間続け、その前後で種々の計測をすると、筋肉量が有意に増加しているという結果が出ました。年をとっても運動したら筋肉は増えるので無駄ではないとヒトには言いながら、自分では何もして来なかったのですが、こういうことになると、Evidence-based medicine に則り、新たな motivation となり、継続可能になることが良くわかりました。

学会としては、以前から縁のある薬理学会、NO学会、眼薬理学会、高血圧学会、循環薬理学会に参加しました。役職を経験した関係で年会費あるいは学会参加費が不要なのがその理由かもしれません。大変驚いたことに高血圧学会では、今年度の「学会賞」を受賞することになり、一年ぶりに講演をすることに

なりました。何を喋ったら良いのかが分からない状態で抄録の締切まで10日間しかなくドタバタしましたが、賞の意義からするとこれまでの研究歴を述べても構わないと自己判断して、山本先生、稲上先生、戸田先生に教えていただいた研究の成果をつないだ内容にすることにしました。この学会には第1回から参加していますが、このような賞が最近制定されていたとは知りませんでした。しかし、一年に臨床1人、基礎1人の受賞という名誉あるものだと分かり、大変光栄に思っています。関係していただいた先生方に深謝いたします。

また、循環薬理学会については、発足以来26年間事務局を管理し、この10年間は会長として運営に関与してきましたが、今年度からは幹事でなくなるのを機に、それぞれ香川大の西山教授と奈良県立医大の吉栖教授にお願い致しました。本学会は平成3年に戸田教授と安孫子教授が、薬理学会より専門性の高い分科会として創設されました。残念ながら循環薬理学を取り巻く研究環境は発足当時とはかなり異なってきましたが、薬理を中心とした基礎医学者だけの貴重な学会なので、細々でも構わないのでこれからも継続・発展していくことを祈念しています。

今年はもう一つ大きな出来事がありました。九月に10日間ほどかけてイタリアへの団体旅行に一人でこっそり参加してきました。20人程度の団体旅行であり、1人で参加していたのは4人だけでした。必然的にこの4人は群れをなすのですが、最後までお互いに何をしている人かは不明でした。多くはカメラ好きの方で、一人でサクサクと行動し、いかにも旅行慣れしている方々でした。また、リピーターもかなりいて、私のように団体旅行もイタリアも初めてという人間はほとんどいない状態でした。そういう状況が意外と楽しく、ガイドさんの旗のもとにミラノ、ベニス、フィレンツェ、ローマ、アルベロベッロ・マテーラ・ポンペイ、ナポリなどの都市をバスで巡ってきました。これまで国際学会には多く参加してきたので、その関係で訪れた国を数えるとイタリアがちょうど30ヶ国目に当たりました。逆に30番目がイタリアという日本人は他にいないと言われながら、ワインを片手に楽しい日々を過ごしてきました。これ迄は自分で飛行機や宿を予約し、学会前後の少ない期日で如何に楽しい旅程を立てるのが楽しみだったのですが、今回のように多くの大都市を巡るツアーには団体旅行ならではの楽しさがあることがわかりました。例えば、バチカン美術館のようにバチカン市国を訪れるほとんど全ての人が訪ねる場所は、個人で行くと入場券を求める行列と入場券を持って入館する行列がそれぞれ凄まじ

く長く、場合によってはそれぞれ1時間程度かかるそうですが、海外からの団体客は5分くらい待つだけで特別なゲートから入場できました。これこそ団体旅行の醍醐味ではないかと思います。なお、この団体旅行に車椅子で参加されている方がおられました。奥さんが歩行困難なのですが、我々がガイドについて walking tour をしている状況では、ご主人が持参された車椅子で遅れないように素早く対応されており、他人が手を貸す余地もないくらい素晴らしい介助をされていました。これには他の参加者もびっくりすると共に大変感動いたしました。変な気遣いもなく、全員が楽しく過ごせた団体旅行でした。

年末にあたり、じっくり一年間を振り返ってみたために長々と雑文を書いてしまい申し訳ありません。非常勤講師・非常勤医師としてジム通いを続けながら、できれば今年もぶらっと学会や海外旅行に参加したいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

「華麗（加齢）なるトラバークについて」

中村敏子（関西福祉科学大学）

今春、20年以上勤務した国立循環器病研究センター（国循）を退職し、新しい職場（関西福祉科学大学・福祉栄養学科）に教授として赴任いたしました。6月のこう楽会の集いでは、冨田教授のお計らいで、山本先生からの花束贈呈を演出していただき、望外の喜びで大変感激しました。改めまして、お心遣いに感謝申し上げます。

さて、私が国循に勤務しましたきっかけは、出産後約1年がたち、そろそろ職場復帰をしたいと、第1内科・武田教授にご相談したからです。当時、国循の松岡部長（武田先生と同門）がスタッフを急募しておられました。今西先生の後任という形で勤務することになり、今西先生や数か月前から国循に勤務していた錦見先生（第1内科）には、いろいろと教えていただき、感謝しております。山本先生にご報告しました時には、あそこはそんなに長く務めるところではないと言われたことをよく覚えています。当時の自分の状況を思い出すと、確かに分不相応な就職でした。その後、10年ぐらい勤務して、ようやく国循のスタッフらしくなったように思います。いわば周回遅れのランナーのような感じで、周りの優秀な人々とは比較しないように努めました。

では、なぜ長く働くことになったかと考えてみますと、いろいろと大変でしたが、面白いこともあったからです。若干の地域性はあるものの、ほぼ全国からレジデントやスタッフが集まっており、彼・彼女達との交流が面白かったです。高血圧・腎臓にかかわる先生方もたくさんいて、勉強になりました。木村先生から学ぶ事が多かったです。腎臓を診ている関係で、他科との丁々発止のやり取りもあり、ストレスもありましたが、多くの循環器系疾患を学ぶことができ、臨床医として成長しました。高血圧・腎臓病の王道を歩むような研究はできませんでしたが、二次性高血圧、慢性腎臓病や循環器疾患の関わり、病理学的検討など、いくつかの臨床研究を行うこともできました。また、学会活動としては、河野先生が会長をされた第36回日本高血圧学会総会で事務局長を担わせていただく機会を得て、大変勉強になりました。正直に言って、とても面白かったです。その節は、こう楽会の先生方に、大変お世話になり感謝しております。その頃、高血圧学会には大きな風が吹き、女性の登用という社会の風潮の中、昨年秋から高血圧学会初の女性・理事を拝命し、男女共同参画委員会委員長・禁煙推進委員会副委員長を担っております。

さて、循環器疾患と慢性腎臓病が深く連関しあっていると、国循で働いてすぐに実感しました。多くの場合、腎臓を犠牲？にして、脳心血管を助け、一旦は透析導入などで難を乗り越えても、次の心血管病・感染症で終末を迎える。その場合の、体外循環療法は難儀なものとなる、というような感じでした。その難儀なところを担うのが、高血圧腎臓科の腎臓系医師達になり、毎年負担が大きくなっていきました。勤務した頃は高血圧腎臓科のスタッフは10名で、高血圧系6名、腎臓系4名でした。その後、腎臓系は2名まで減ることもありました。そのような日々を送る中で、若干の勤務疲労を覚えるようになりました。この数年、国循全体も変わっていく中で、進退についても考えるようになっておりました。昨年夏に、部長公募があり応募しましたが、残念な結果でした。色々な気持ちを感じましたが、良い機会を得たと思い、国循を卒業しようと決めました。

いくつかのお声掛けをいただく中、昨年晩秋、栄養学科教授へのお誘いを受けました。医療者の中でも栄養士さん達には、国循の「かるしお」事業や生活習慣病教室などでかかわりもあり、専門の高血圧・腎臓病での減塩の重要性からも、親近感がありました。今までと異なる環境となる事への若干の不安もありましたが、ちょうど良い年回りともなっており、えいやっとばかりに、加

齢に伴い転職することにいたしました。その後、種々の手続きも順調にすすみ、今春、晴れやかな気持ちで、教授として勤務開始いたしました。現在は、2・3年生の病態学（春・秋学期）を講義し、2年生の生理学実習（春学期）を担当しています。

病気について学びなおし、スライドを作る日々です。教師はアスリートとはよく言ったもので、立位で1.5時間、毎週4コマ話し続けるのは、体力がいります。お陰様で、膨張しかけていた身体も引き締まって（?）、以前の服も着用できるようになり、思わぬ経済効果もありました。まだまだ、華麗なるトラバークには程遠い現状ですが、少しでも学生の役に立つよう授業を工夫して、ゼミ生と一緒に栄養に関する研究も行っていこうと思っています。今後とも、どうぞ宜しくお願いします。



薬理学教室での2年間

修士課程2年 塩谷一史

薬理学教室でお世話になり始めて、早くも2年が経過しようとしています。薬理学や癌について全くと言っていいほど何も知らない状態からスタートし、現在まで過ごしてきました。あっという間ではありましたが、非常に濃い内容の日々でした。非常に多くのことを学ぶ機会に恵まれ、多くの人に助けられ、支えられてきました。それと同時に多くの方々へ大変なご迷惑をおかけしてきました。この場をお借りし、心より謝罪と感謝を申し上げます。

入学当初、右も左もわからない状態で塩田先生、田中先生をはじめ多くの方に実験指導をしていただきました。ノートの書き方をはじめデータの見方や考察の仕方等、本当に初歩的なことから教えていただきました。改めて自分の知識の無さ、実験手技の無さを痛感しました。その中で多くの失敗をしてきました。試薬の濃度や種類、実験手順そのものを間違えることもあり、自身でそれに気づかないということもありました。何度も失敗し、何度も叱られました。

初めて担当したプログレスレポートでは、自身のやっていることを理解しないまま臨み、何時間もかけてしまいました。準備不足でジャーナルクラブを延期したこともありました。薬理学実習ではラットのカテーテルを抜き、AKTAのボタンを押し間違えて停止させてしまったこともありました。分注試薬を間違えて使用し、他の研究室の先生方にご迷惑をおかけしたこともありました。さらに個人的に事故を起こしてしまったり、就職活動では口利きしていただいたにも関わらず、準備不足で不採用になったりもしました。自分でも情けないほどに、多くの人にご迷惑をおかけしてきました。

失敗ばかりではありましたが、褒めていただくことも多々ありました。一冊目の実験ノートが埋まり、実験のまとめでは成長したと塩田先生に言っていただけでした。先生からこの言葉をいただけたときは、本当にうれしかったことを今でも覚えています。いつも飛躍しがちな考察に関しては田中先生が褒めてくださりました。北先生や壁井先生、西出先生には実験に取り組もうとしている姿勢をよく褒めていただきました。その他にも多くの方が評価してくださいました。

また、相談に乗っていただくことも多々ありました。実験で叱られ、落ち込んでいるときは何度も三浦先生に相談に乗っていただきました。進路に迷った

ときは冨田先生に相談に乗っていただいたりもしました。いつも親身になって聞いていただき、悩みを解決するためには何をすべきなのか教えていただきました。

日常では松永先生をはじめ山口先生、北島先生、西田さん、藤田さん、都さんはいつも私のくだらない話に付き合ってくださり、何度も愚痴を聞いていただきました。実験に関して以外のことを多く教えていただきました。特に松永先生は実験で遅くなった時等、頻繁に愚痴を聞いていただきました。

岩尾先生や泉先生、岡先生、高橋さんはお会いする機会が多くはありませんでしたが、お忙しい中いつも笑顔で接していただき、話を聞いてくださいました。

薬理学教室に入学してから約2年間、本当に多くの方に支えられてきました。未だに至らない点が多く、ご迷惑をおかけしていますが、今の私があるのは皆様のおかげです。今まで生きてきた25年間で最も充実し、最も自分を成長させていただいた2年間だと思っています。残り数か月ではありますが、変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。そして最後になりますが、皆様、今まで本当にありがとうございました。

第 24 回市大フォーラム

2017 年 8 月 23 日（水）、あべのメディックス 6 階研修室におきまして、市大フォーラムを開催致しました。御出席者 37 名、発表演題 12 題の盛会となりました。暑い中、また遠方より御参加いただきました先生方、本当にありがとうございました。

プログラム（敬称略）

12:30-12:35 開会宣言

座長：座間味 義人（徳島大学大学院医歯薬学研究部臨床薬理学）

1. 12:35-12:55 大阪大谷大学薬学部臨床薬理学講座

下川 隆臣

LPS 誘発性急性腎障害における α 2 アドレナリン受容体遮断薬の影響

2. 12:55-13:15 金沢医科大学薬理学

田和 正志

モノクロタリン誘発肺高血圧ラットに対する一酸化窒素関連薬の効果

座長：池田 康将（徳島大学大学院医歯薬学研究部医科学部門生理系薬理学分野）

3. 13:15-13:35 徳島大学病院薬剤部

今西 正樹

キサランチンオキシダーゼ阻害剤フェブキシソスタットの血管リモデリング
に対する効果

4. 13:35-13:55 大阪市立大学大学院医学研究科分子病態薬理学

松永 慎司

PHD 阻害剤の腫瘍血管正常化への影響

座長：宮本 理人（徳島大学薬学部・医薬品機能生化学分野）

5. 13:55-14:15 三重大学大学院医学系研究科統合薬理学

弓削 瑞葵

HSP90 阻害薬の網膜障害に関与するメカニズムの検討

6. 14:15-14:35 香川大学医学部薬理学教室
中野 大介
SGLT2 阻害薬と腎尿細管内の糖

14:35-14:55 BREAK

座長：人見 浩史（香川大学医学部薬理学教室）

7. 14:55-15:15 徳島大学大学院医歯薬学研究部医科学部門生理系薬理学分野
濱野 裕章
慢性腎不全における尿毒素蓄積はヘプシジンを介した鉄代謝恒常性破綻
に關与する

8. 15:15-15:35 鳥取大学医学部分子薬理学教室
市原 克則
5'-リピッドホスファターゼ SHIP2 が摂食行動に与える影響の解明

9. 15:35-15:55 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬学域・医薬品機能生化学分野
土橋 有希
3T3-L1 脂肪前駆細胞の分化誘導に対する加圧刺激の影響

座長：松永 慎司（大阪市立大学大学院医学研究科薬理学教室）

10. 15:55-16:15 三重大学大学院医学系研究科統合薬理学
山田 英嗣
ゼブラフィッシュ創薬：抗メラノーマ化合物フルベンダゾールの発見

11. 16:15-16:35 大阪市立大学大学院医学研究科分子病態薬理学教室
北島 正二郎
代謝老廃物に対するストレス応答の中で HIF-1 α が介する代謝チェック
ポイント機構

12. 16:35-16:55 Vanderbilt University Medical Center / 香川大学医学部薬理学
北田 研人
うどん県で食塩の研究～ナトリウム・体液バランスの再考～

16:55-17:00 閉会宣言

論文業績

1. Osada-Oka M, Shiota M, Izumi Y, Nishiyama M, Tanaka M, Yamaguchi T, Sakurai E, Miura K, Iwao H. Macrophage-derived exosomes induce inflammatory factors in endothelial cells under hypertensive conditions. *Hypertens Res.*2017;40(4): 353-360
2. Shojiro Kitajima, Kian Leong Lee, Hiroki Hikasa, Wendi Sun, Ruby Yun-Ju Huang, Henry Yang, Shinji Matsunaga, Takehiro Yamaguchi, Marito Araki, Hiroyuki Kato, Lorenz Poellinger. Hypoxia-inducible factor-1 promotes cell survival during ammonia stress response in ovarian cancer stem-like cells. *Oncotarget.*2017
3. Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takada K, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M. Using TILs to predict therapeutic effect of chemotherapy(pertuzumab, trastuzumab, docetaxel) on HER2-positive breast cancer. *Anticancer Res.*2017;37: 5623-5630
4. Kita K, Shiota M, Tanaka M, Otsuka A, Matsumoto M, Kato M, Tamada S, Iwao H, Miura K, Nakatani T, Tomita S. Hsp 70 inhibitors suppress androgen receptor expression in LNCaP95 prostate cancer cells. *Cancer Sci.*2017;
5. Goto W, Kashiwagi S, Asano Y, Takada K, Takahashi K, Hatano T, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M. Circulating tumor cell clusters-associated gene plakoglobin is a significant prognostic predictor with breast cancer. *Biomark Res.*2017
6. Nishimura Y, Ueki M, Imanishi M, Tomita S, Ueno M, Morishita J, Nishiyama T. Reoxygenation with 100% oxygen following hypoxia in mice causes apoptosis. *Shock.*2017
7. Koyama S, Matsunaga S, Imanishi M, Maekawa Y, Kitano H, Takeuchi H, Tomita S. Tumour blood vessel normalization by prolyl hydroxylase inhibitor repaired sensitivity to chemotherapy in a tumour mouse model. *Sci Rep.*2017;7
8. Tsounapi P, Honda M, Dimitriadis F, Shimizu S, Shiomi T, Hikita K, Saito M, Tomita S, Sofikitis N, Takenaka A. Antioxidant treatment ameliorates the

diabetes-induced dysfunction of the vas deferens in a rat model. *Andrologia*.2017

9. Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takada K, Takahashi K, Noda S, Takashima T, Onoda N, Tomita S, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M. Use of Tumor-infiltrating lymphocytes (TILs) to predict the treatment response to eribulin chemotherapy in breast cancer. *PLoS One*.2017;12(2):e0170634
10. Islam J, Sato S, Watanabe K, Watanabe T, Ardiansyah, Hirahara K, Aoyama Y, Tomita S, Aso H, Komai M, Shirakawa H. Dietary tryptophan alleviates dextran sodium sulfate-induced colitis through aryl hydrocarbon receptor in mice. *J Nutr Biochem*.2017;42:43-50
11. Mino-Oka A, Izawa T, Shinohara T, Mori H, Yasue A, Tomita S, Tanaka E. Roles of hypoxia inducible factor-1 α in the temporomandibular joint. *Arch Oral Biol*.2017;73:274-281
12. Li G, Miura K, Kuno M. Extracellular phosphates enhance activities of voltage-gated proton channels and production of reactive oxygen species in murine osteoclast-like cells. *Pflugers Arch* 2017;469:279-292
13. Naghavi N, Yokoyama H, Yamashina Y, Hirasawa Y, Takeda R, Ota A, Imai D, Emoto M, Okazaki K, Miura K. Elevation in Serum Irisin Levels after a Single Bout of Exercise do not Modulates Resting Energy Expenditure and Diet-induced Thermogenesis in Healthy Young Adults. *Osaka City Med J*.2017
14. Kita K, Shiota M, Tanaka M, Otsuka A, Matsumoto M, Kato M, Tamada S, Iwao H, Miura K, Nakatani T, Tomita S. Heat shock protein 70 inhibitors suppress androgen receptor expression in LNCaP95 prostate cancer cells. *Cancer Sci*.2017;108(9):1820-1827
15. Wendi Sun, Hiroyuki Kato, Shojiro Kitajima, Kian Leong Lee, Katarina Gradin, Takashi Okamoto, Lorenz Poellinger. Interaction between von Hippel-Lindau Protein and Fatty Acid Synthase Modulates Hypoxia Target Gene Expression. *Sci Rep*.2017;7
16. Kabei K, Tateishi Y, Nozaki M, Tanaka M, Shiota M, Oka-Osada M, Nishide S,

Uchida J, Nakatani T, Tomita S, Miura K. Role of hypoxia-inducible factor-1 in the development of renal fibrosis in mouse obstructed kidney: special references to HIF-1 dependent gene expression of profibrogenic molecules. J Pharmacol Sci.(in press)

学会・研究会発表

第 46 回日本心脈管作動物質学会、2017 年 2 月 10-11 日、沖縄
代謝・循環器病研究の最近の進歩—血管リモデリングにおける平滑筋由来 HIF-1 α の役割
富田修平

第 90 回日本薬理学会、2017 年 3 月 15-17 日、長崎
SDF-2 の安定化はオキサリプラチン耐性に重要である
大塚 明日香、田中 昌子、高橋 克之、塩田 正之、松永 慎司、富田 修平、三浦 克之

HSP70 によるストレス適応に着目した抗腫瘍薬の創薬スクリーニング
塩田 正之、富田 修平

薬剤誘導性血管新生による腫瘍内薬物動態および抗癌剤感受性に対する影響
評価
松永 慎司、西出 峻治、田中 昌子、塩田 正之、三浦 克之、富田 修平

去勢抵抗性前立腺癌に対して HSP70 阻害剤は YB-1 を介してアンドロゲン受容体とアンドロゲン受容体スプライスバリエント 7 の発現を抑制する
田中 昌子、北 和晃、塩田 正之、大塚 明日香、松永 慎司、三浦 克之、中谷 達也、富田 修平

第 94 回日本生理学会大会、2017 年 3 月 28-30 日、静岡
Remodeling of cardiovascular system driven by oxygen—Role of hypoxia inducible factor-1 in Vascular Remodeling
富田修平

第 38 回日本循環制御学会、2017 年 6 月 16-17 日、大阪

平滑筋由来 HIF-1 α が大動脈瘤形成に対して保護的に作用するメカニズムの解析

今西正樹、松永慎司、石澤啓介、玉置俊晃、富田 修平

第 131 回日本薬理学会近畿部会、2017 年 6 月 30 日、愛知

HSP70 阻害剤の去勢抵抗性前立腺癌における抗腫瘍効果の検討

北和晃、塩田正之、田中昌子、松永慎司、三浦克之、富田修平

第 38 回日本炎症・再生医学会、2017 年 7 月 18-19 日、大阪

第 5 回低酸素研究会、2017 年 7 月 29 日、東京

HIF-2 α によるエピゲノム制御を介した CD70 発現制御と癌細胞の足場非依存性増殖への寄与 (ポスター)

北島正二郎、加藤 宏幸、Kian Leong Lee、Lorenz Poellinger

薬剤誘導性腫瘍血管正常化による腫瘍内低酸素環境の改善

松永慎司、西出峻治、北島正二郎、富田修平

第 15 回がんとハイポキシア研究会、2017 年 11 月 10-11 日、兵庫

HIF-2 α は持続的低酸素下でエピゲノム制御を介して CD70 発現や癌幹細胞性の獲得に寄与する (ポスター)

北島正二郎、Kian Leong Lee、藤岡正喜、Wendi Sun、荒木真理人、加藤宏幸、Lorenz Poellinger

腫瘍血管新生による腫瘍血管再構築は抗癌剤感受性を改善する

松永慎司、西出峻治、北島正二郎、山口雄大、三浦克之、富田修平

第 132 回日本薬理学会近畿部会、2017 年 11 月 24 日、大阪

がん微小環境変化が抗癌剤感受性に与える影響の検討

松永慎司、西出峻治、北島正二郎、山口雄大、塩田正之、三浦克之、富田修平

遠隔臓器の一過性虚血処置はエクソソームを介した細胞間情報伝達によって心筋梗塞慢性期の心リモデリングを抑制する

山口雄大、泉康雄、塩田正之、富田修平、岩尾洋

第 27 回日本循環薬理学会、平成 29 年 12 月 1 日、愛知

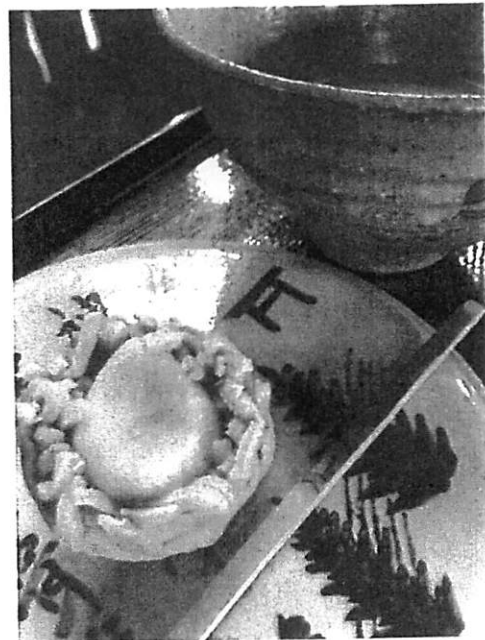
遠隔臓器の一過性虚血コンディショニングは心筋梗塞慢性期の心リモデリングを抑制する

山口雄大、泉康雄、塩田正之、北島正二郎、松永慎司、三浦克之、岩尾洋、富田修平

心血管代謝週間 CVMW2017、平成 29 年 12 月 8-10 日、大阪

遠隔臓器の一過性虚血処置は心筋梗塞慢性期の心リモデリングを抑制する

山口雄大、泉康雄、塩田正之、富田修平、岩尾洋



五十鈴茶屋本店にて（伊勢神宮・おかげ横丁）
あまりの美味しさに皆で喰った、栗きんとん

今年の出来事

3月

・大塚明日香さんが修士課程を修了されました。社会人として充実した毎日を過ごされることを心より願っております。

4月

・塩田 正之先生が薬理学教室の講師から研究支援プラットホーム共同実験機器施設の講師に移動されました。所属は変わられますが、今後とも大変お世話になります。よろしくお願いいたします。

・田中 昌子先生が薬効安全性学教室の特任助教を退職され、早稲田大学理工学術院の助教に就任されました。おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

・北島 正二郎先生が特任講師として着任されました。よろしくお願いいたします。

6月

・治楽会をあべのハルカス 13 階の中華料理 桃谷樓 阿倍野賓筵にて開催しました。参加者 36 名、いつもの通り和やかで楽しい盛会となりました。中村 敏子先生の教授就任のご挨拶もありました。おめでとうございます。





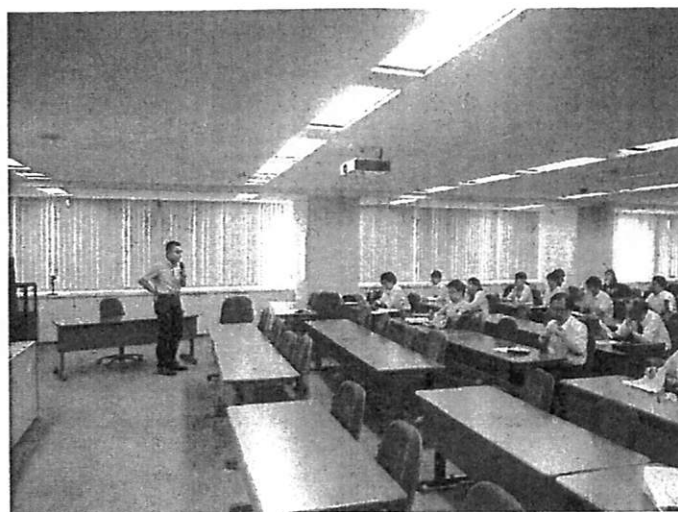
7 月

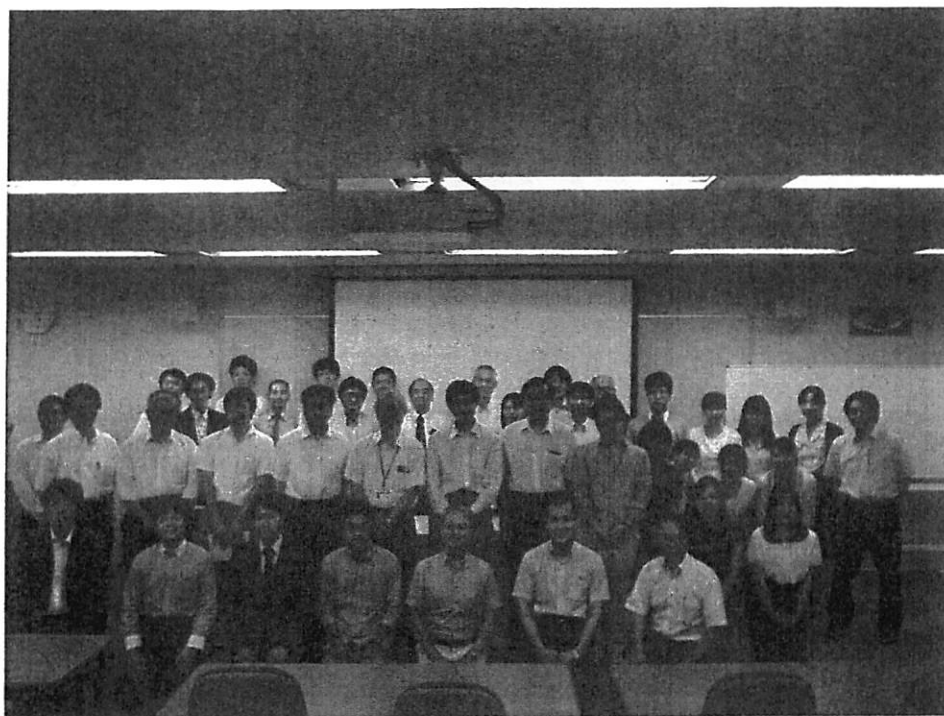
・ 北 和晃先生の学位論文が受理されました。おめでとうございます。

8 月

・ 都 志由架（みやこ・しゆか）さんが秘書として着任されました。よろしくお願いいたします。

・ 第 24 回市大フォーラムをあべのメディックス研修室にて行いました。遠くからわざわざお運びくださいました先生方に感謝申し上げます。





9月

- ・西出 峻治先生が国際学会（スペイン）に参加されました。

10月

- ・山口 雄大先生が助教として着任されました。よろしくお願いいたします。

11月

- ・西出 峻治先生が再び国際学会（カンボジア）に参加されました。
- ・教室旅行で伊勢神宮へ参拝に行きました。まずは腹ごしらえと松阪牛の焼き肉を食べ、大満足して参拝を忘れるところでした。





- ・ 壁井 和也先生の学位論文が受理されました。おめでとうございます。

お知らせ

薬理学教室のホームページを作りました。治楽会のページに入るパスワードは次の通りです。今後内容の充実を図ってまいりますので、アドバイスを願いたします。

yakur i-ocu1949

編集後記

お忙しい中、原稿依頼をご快諾くださいました先生方、本当にありがとうございました。
おかげさまで、今年も無事に発行することができました。

富田先生が来られて2回目の発行です。私は10数年前の5回を含めると、通算8回目の会誌発行となります。4代目教室の創成期に秘書として関わらせて頂き、刺激に溢れた毎日でした。今年度末で秘書のたすきを後任の都さんに渡すことになりました。教室の先生方、治楽会会員の先生方、今まで大変お世話になりました。今後は一会員に戻りますけれど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

藤田（中尾）明子

はじめまして。今年の8月からこちらの教室で秘書としてお世話になっている都 志由架と申します。

前職はピアノの調律師として働いていました。一日中作業場にこもりっぱなしの毎日から一転、多くの人と出会い楽しい毎日を過ごしております。

先生方にはいつも頼りっぱなしで、少しでも早くすてきな心配りのできる藤田さんのような秘書になりたいと思っております。来年度からは、都さんに任せておけば大丈夫！！と言っていただけるよう日々精進してまいりますので、たくさんのご指導をどうぞよろしくお願いいたします。

都 志由架